

特集

『佐々木基一全集』の
完結に寄せて



雑誌『近代文学』の同人たち（撮影日時、場所不明）
（左から、荒 正人、山室 静、平野 謙、本多 秋五、埴谷 雄高、佐々木 基一）
（写真提供：永井 誠氏）

CONTENTS

- 新入生へのメッセージ 「宝の山」も、利用しなければ・・・ 見市 雅俊（図書館長）
- 特集 『佐々木基一全集』の完結に寄せて 杉田 達雄（名誉教授）
- VOICE 「人の力と蔵書の力 ―図書館活動を支えるもの―」 佐藤 善治（図書館職託職員）
- 新収資料紹介 中央大学教職員著作目録・資料目録（2013.6～2013.10 収集分）

【新入生へのメッセージ】

「宝の山」も、 利用しなければ・・・

御入学、おめでとうございます。中央大学は、日本でも有数の伝統校であることはご承知のとおりですが、図書館も、その伝統のおかげで蔵書がおよそ238万冊の多きに達しております。私立大学図書館でみれば、第8位に位置する数字です。（『2014年版大学ランキング』、朝日新聞社より）「紙媒体」だけではありません。「電子媒体」、とりわけ、インターネットを介して利用するデータベースについても、着々とその充実につとめているところです。さらに、この新しいかたちの図書資料を皆さんが有効活用できるようにと建物の改造にも着手し、昨年度、多摩キャンパスの中央図書館では「情報リテラシールーム CITRAS」が開設され、後楽園キャンパスの理工学部分館においても、今年度から「マルチメディアワークスペース」がオープンする運びとなりました。そして、図書館では、大学の正規の科目である「学術情報の探索・活用」法を開講し、さらに、さまざまな講習会を企画して、皆さんの学習をサポートしております。「就活」に関係する講習会も開催しております。このように、皆さんは、「紙媒体」と「電子媒体」の両方を自由に駆使できる環境に置かれたのです。しかし、このせつかくの「宝の山」も、利用しなければ、「宝の持ち腐れ」になってしまいます。まずは、図書館の空気を吸いにご来館を！



図書館長 見市 雅俊

■ 多摩キャンパス 中央図書館3階

使っていますか？ ～図書館情報リテラシールーム ^{シトラス} CITRAS ～

近年の大学では、自ら課題をみつけ、必要な情報や知識を探すことをもとめる授業が増えています。それに伴って、本だけでなくデータベースやインターネットをまとめて活用するための情報探索スキルの重要性も高まっています。

図書館では、学生のみなさんが学術情報リテラシースキルを身につけ使いこなすため、図書資料やデータベースを使った授業や講習会などを行う施設として、2013年9月に図書館3階に情報リテラシールーム「CITRAS」をオープンしました。

全席にパソコンを備え、図書やデータベースを利用しながら勉強することができます。

授業・講習会利用時間以外は一般開放していますので、是非ご利用下さい。

■ 開室時間 10:00 ～ 20:00

■ スケジュール

http://www2.chuo-u.ac.jp/library/citras_schedule.html

CITRASで実施している授業・講習会

■ 学術情報の探索・活用法

大学で学ぶにあたって、基本的に身につけるべき学術情報の取り扱い方を体系的に学ぶための授業科目です。半期の随意科目として、前期・後期とも図書館長が担当しています。

実習をととして、図書館での伝統的な調べ物の手法から電子資料の検索方法を学び、収集した情報を活用してレポートをまとめる力を養います。

■ ミニミニ講習会

学習する上で知っておくと便利なデータベースについて、15分程度で基本的な使い方がわかる講習会です。1回の参加人数も5人程度を目安に、少人数で丁寧に指導しています。予約不要。どなたでも参加できます。

みなさんのご参加をお待ちしています。

講習会のテーマ

- ・CHOIS を使いこなそう
- ・学術論文のさがし方～ CiNii Articles
- ・New York Times を読む！
- ・新聞記事きぼんのき～朝日・読売・日経新聞
など



テーマ別セミナー



2013年12月には就活情報活用セミナーとして、「日経新聞」や東洋経済の「就職四季報」「会社四季報」などを用いた、専門講師による就活生向けの企業・業界情報の収集、活用方法のセミナーを実施し、大好評を博しました。

図書館ではこれからも学生のみなさんの学修や就活に役立つ講習会を企画していきます。

CITRASの由来…

CITRASとは「Commons for Information-based Teaching, Research, Argument and Study」の略称で、中央大学の立地する八王子市東中野地区が昔「由木村」の一部で、「ユギ」の由来は「柚子の木（ユノキ）」が多かったとの説もあることから、柚子の学名「Citrus junos」にちなんで名づけられたものです。

■ 後楽園キャンパス 理工学部分館6階

「マルチメディアワークスペース」オープン！

2014年4月、理工学部分館6階にマルチメディアワークスペースが完成しました。旧視聴覚室をリニューアルしたこのマルチメディアワークスペースでは、理工学部分館や他キャンパスで所蔵している DVD やビデオ、CD、個人で持参した各種メディアなどを視聴することができます。また、図書館の資料を利用したグループディスカッションや、プレゼンテーションの練習など、グループ学習の場としても幅広い利用が可能です。

資料の利用、他キャンパスからの取り寄せ、貸切利用の申し込みなどは、理工学部分館6階カウンターで受け付けています。

● ● ● マルチメディアワークスペースは以下の2部屋から構成されています ● ● ●

1 図書館 PC 室

後楽園 IT センター実習室と同じ環境の PC を約20台備えています。DVD や Blu-Ray をヘッドホンで視聴したり、PC を活用した学習をすることができます。講習会等のイベント以外は自由に入室してください。またプレゼンテーションの練習に役立つ機能も備えており、部屋を貸し切って利用する事が可能です。

2 グループ学習室

新旧様々なメディアの視聴機器を備え、ワイヤレスヘッドホンで視聴することができます。多様な資料を活用しながらグループ（最大6名）で学習する場所として最適です。図書館 PC 室同様に貸切利用ができ、事前予約も受け付けています。

みなさんのご利用を
お待ちしております！

特集

『佐々木基一全集』の完結に寄せて

杉田 達雄(名誉教授)

昨年9月、『佐々木基一全集』全10巻(河出書房新社)が完結した。そこで、中央大学に関わりのあった佐々木基一について、その「人と業績」を記しておきたい。

佐々木基一(写真右)は通常、文芸評論家といわれたが、その守備範囲は多岐にわたり、広く、深い。彼の



没後、『群像』(1993年7月号)に載った追悼座談会で、本多秋五が「佐々木君は、千手観音というほどでもないけども、手が何本かあったね。」と語ると、^{はにやめたか}埴谷雄高が「八本あったね。全てに興味を持って、すぐやる。」と受け、小田切秀雄は「非常に早くから映画をやったりしている。」と応じているほどである。

佐々木は、青木文象、篠塚正などの筆名も用いたが、本名は永井善次郎。1914年11月30日、広島県生まれ。奇しくも今年が生誕100年にあたる。6人兄姉の末っ子。すぐ上の姉貞恵は原民喜夫人である。

広島高等師範附属中学校時代の彼は、寄宿舎で同室と

なった友人の実家が書店だったことから、漱石や芥川を読み、フランスやロシアの小説に親しみ、文学に開眼する。この頃、映画「何が彼女をそうさせたか」を見て、芸術としての映画にも目覚める早熟な少年だった。当時の彼は、むしろ映画に興味を持ち、学校の禁を犯して映画館に通ったという。後に、『映画評論』の同人になって、福永武彦、清水晶らを知り、ここに映画評や映像論を毎号書く。やがてエイゼンシュテインのモンタージュ論やベラ・バラージュの映画論を学び、自らの本格的な映画理論を構築していく。これらの論文は『映像論』(勁草書房、1971年)として上梓されるが、その萌芽はすでに中学時代にあったといえよう。

1932年4月、旧制山口高校に入学。2年先輩の平田耕一に導かれて、思想運動に身を投じ、マルクス主義の文献を読む。また同じ先輩に荒正人もいた。だが、彼はその頃停学処分を受けていて、佐々木と会うことはなかった。

平田耕一の薦めで『山高校友会雑誌』に「映画批評について」を発表。佐々木の処女論文である。これを書くのに彼が参考にした文献は、『マルクス・レーニン主義芸術学研究』に載った宮本顕治の「文学批評の基準」や川口浩の「レーニン主義文学理論の確立へ」であったが、これらの文学論をよく読み解き映画批評に応用した力量は、18歳の高校生とは思えない。ちなみに川口浩とは、プロレタリア文学運動で活動後、中央大学教授となり、文学部長も務めた独文専攻の山口忠幸(1905～1984)の筆名である。

佐々木はこの頃、左翼学生の読書会に参加し、6ヶ月間の停学処分を受けている。やがて大学進学の時期になり、

哲学者中井正一を訪ねて進学相談をする。佐々木の家が中井正一の実家と仕事上の付き合いがあり、この哲学者の意見を聞いてみたいと思ったのだ。その時、中井から『美・批評』を贈られ、我が意を得て美学へと進む。

1935年、東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学。同期に久保田正文、沢村勉などがいた。原民喜の紹介で、宇田零雨^{れいう}を知り、彼の主宰する『草くき』の会員になって、「大魚」の俳号で、俳句、俳論を発表。零雨、民喜から連句の手ほどきを受け、俳諧の面白さと奥深さを知る。佐々木が晩年まで連句を嗜んだのはこの時の体験による。

その一方で、平田に誘われて、「明治文学会」の会員になり、仲賢礼（筆名・木崎龍）を知り、仲の紹介で小田切を知る。さらに仲に連れられて、北見志保子のサロンにも顔を出す。「平城山」の作者で知られる北見は、歌誌『月光』を発行しており、この雑誌に佐々木は卒業後、『『風雅』について』を6回にわたり連載する。

大学では、学生消費組合が発行する『図書評論』の編集を手伝い、ここに池田礼二の筆名で入学後初めての論文「倫理的と社会的の相剋の悲劇」を書く。また美学の同人雑誌『新世紀』に初めての小説「叔父」を発表。『帝国大学新聞』にも短編「お嬢さん」を掲載し、漠然と小説家を夢見たようだ。また山室静、本多秋五、平野謙らと『批評』の同人となり、『『若い人』について』を執筆。授業にはほとんど出なかったようだが、大西克礼教授の美学講義で触れられたルカーチの所説だけは頭に残ったという。佐々木は後年、「ルカーチを理論的導き手とする素地がこの時できた。」と回想している。

卒業は1938年。徴兵検査で兵役は免除。翌年、荒、小田切の3人で、『文芸学資料月報』を発行するが、警察に目をつけられ、3号で廃刊。だが佐々木はこの冊子に、「ゲーテ・シラー往復書簡抄」を3回に分けて翻訳している。後にこうした仕事が、ルカーチ、ペラ・パラージュ、M. シートン、E. フィッシャー、パヴェークそしてベンヤミンなどの作品を、共訳を含めて多数翻訳することにつながっていく。またこの時期、彼のハンサムぶりがかわれて松竹大船撮影所から俳優にスカウトされたことがあった。

太平洋戦争が始まる直前、大井広介、坂口安吾らの『現代文学』に「観念の放棄」、「風俗小説について」などを書き文芸評論家への地歩を固める。1943年の夏から半年ほど、信濃追分の旅館「油屋」に結核療養のため滞在している。



翌年1月、一時帰京。4月末、佐々木、小田切、荒の3人は、これまで続けてきた文学研究会が治安維持法違反に問われ逮捕。だが佐々木はほどなく「心気亢進」を理由に釈放。その夏再び、結核療養のため「油屋」に長期滞在。そこで中村真一郎（写真上）、加藤周一を知る。また堀辰雄の知遇を得たのもこの時期である。

敗戦は疎開先の岩手県花巻で迎えたが、すぐ千葉県松戸に転居し、さらに阿佐ヶ谷に引っ越す。佐々木と荒は10月1日、吉祥寺の路上で埴谷、本多、平野と出会う。この運命的とも言える偶然の出会いが、自由にものが言える時代を迎えて、同人雑誌の創刊に発展する。その後、小田切、山室が加わり、世に言う「七人の侍」による『近代文学』（写真下）が創刊された（表紙写真参照）。創刊号から佐々木は、小説『停れる時の合間に』を連載するが5回で中断。1978年に再開するも、この長編はついに完成することはなかった。

1948年5月、佐々木は最初の著書『個性復興』を上梓。7月には花田清輝、関根弘らと『綜合文化』を創刊。さらに10月には岡本太郎、椎名麟三らの「夜の会」に参加、アヴァンギャルドの気分を味わう。彼は小説を書きたかったが、生活のために書評や文学論を書いて糊口をしのぎ、『リアリズムの探求』、『昭和文学論』等を刊行。それらの評論で彼は、繊細で鋭い感受性と堅固な理論を備えた戦後文学を代表する評論家の旗手となった。

1949年1月、日本共産





党に入党するが、翌年、細胞の解散により自然離党。その年、「新日本文学会」常任委員。夏は堀辰雄の別荘で過ごす。この頃、夫人(写真上)との共訳で『ポールとヴィルジーニ』、『地主の家の物語』の翻訳を出す。

これまでの映画論が注目されて、1956年4月、中央大学文学部の兼任講師となり、映画論を担当。翌年5月、花田清輝、安部公房、野間宏、吉本隆明らと「記録芸術の会」を結成する。

1963年4月、中央大学理工学部専任講師に就任(65年教授)。文学論とドイツ語を担当。大学では永井善次郎を名乗った。そのため永井が佐々木であると気づく人は少なかった。6月、ソヴィエト作家同盟の招きで小林秀雄(写真左下)、



安岡章太郎と訪ソ。佐々木には初めての外国だった。

1972年、ウィーンに留学。雑誌『文芸』の求めに応じて「ウィーンだより」を連載。帰国後、『ウィーン・鏡の中の都』として刊行。佐々木はこの頃、『文芸』の福島紀幸編集長から創作を勧められ、『文芸』以外の雑誌にも多くの小説を発表する。またドイツで見たリーメンシュナイダーの祭壇彫刻に感動し、その作品論を『すばる』に断続的に発表。傍ら、画家城所昌夫に師事し、絵画グループ「水曜会」を結成、銀座で展示会を催し、『新日本文学』の表紙を描いてもいる。

1985年、定年により退職すると、彼を宗匠にもっぱら連句の会が開かれた。なぜ連句なのかは、若き日に原民喜らとの経験を思えば理解できる。彼は折にふれて、大庭みな子、真鍋呉夫、有馬弘純、宮内豊などと連句を卷いていたのだ。

佐々木の最後の作品『私のチェーホフ』(写真右下)が、1990年に第43回野間文芸賞を受賞する。病がちで、体力の衰えは否めなかったが、1992年に佐々木は、アジア・アフリカ諸国からの留学生のために中央大学に一千万円を寄贈、「永井善次郎奨学基金」が設立された。佐々木の逝去はその翌年の4月25日である。

この全集が著者没後20年、5年の編集作業を経てかくも早く完結し得たのは、ひとえに中央大学図書館の入矢玲子、金津有紀子、木下明子、山田祐子の各氏等レファレンスの全面的な協力の賜物である。ここに記して謝意を表しておきます。



※写真提供は永井誠氏による。(編集部)

中央大学図書館では、この特集と連動して
『第21回中央大学図書館企画展示：佐々木基一の人と仕事』と題する催しを開催いたします。
この機会にぜひご覧下さい。

◆期間：2014年4月2日(水)～5月10日(土)
◆場所：中央図書館 2階展示コーナー

人の力と蔵書の力 —図書館活動を支えるもの—

図書館嘱託職員 佐藤 善治

筆者は本年3月を以て、長年勤務した中央大学を定年退職することとなった。4月からは嘱託職員として勤務することになるが、退職にあたり、通算で33年を過ごした図書館の業務について、幸いにも本誌上に意見を述べる機会を頂戴することになり、管見の範囲ではあるがこの間考えてきたことを簡単に述べさせて頂きたいと思う。

中央大学図書館の設置目的は何であろうか？——それは、とりも直さず、中央大学の行う教育活動と研究活動を図書館の持つ二つの財産(力)によって支援することである。それは次の二つである。

- ①人(スタッフ) ②蔵書(コレクション)

この二つが有効に結びつくことで図書館の総合力となり、やがては図書館の利用者に様々なかたちで還元されることになる。では、①と②を単純に足し算することで、図書館の総合力が生まれるのであろうか？ 答えは完全に「否」である。

図書館の総合力はこの二つの財産(力)のうち、どちらか一方の低いレベルで決定されるのである。①「人」が質量共に豊かであっても、②「蔵書」(この場合、媒体を問わない)が貧しければ、利用者の手元に届くものに自ずと大きな限界が生じ、中央大学の教育・研究活動は停滞することになる。また反対に、②「蔵書」が質量共に豊かであっても、①「人」が貧弱であれば、豊かな蔵書は完全に宝の持ち腐れとなる。図書館の総合力を高めるには、人の力と蔵書の力を同時に高めることが求められるのである。

33年間勤務し、直近の十数年間強く感じていることは、①「人の力」が眼に見えて弱って来たことである(従って、図書館の総合力は確実に低下している)。これには様々な要因が考えられるが、まず表層面を見てみると、少子高齢化に起因する大学間競争の激化に伴って正規職員の削減、それと同時に並行で進行した非正規職員の急増、業務委託の拡大などが挙げられるが、「核」となるべき正規職員の削減とは反対に、決して安定雇用とは言えない非正規職員(業務委託を含む)が急増し、今や大学図書館、公共図書館など

館種を問わず、将来図書館で働くことを目指す若い世代に様々な意味で「司書は佳き仕事」とは到底言えない時代となってしまった。こうした時代を作ってしまった責任の一端は我々の世代が負わなければならない。

さて、ここでもう一度「人の力」の中心となる(であろう)正規職員について、「人の力の豊かさ」という面から見てみたい。私がここでどうしても強調しておきたいのは、個別の大学図書館や図書館関係団体が行ってきた「制度としての研修」、「組織としての研修」の劣化と一人一人の館員に求められる「個人としての自主的研修」の劣化が同時進行で進んでいることである。

私が図書館で働き始め、経験を重ねた1980年代から90年代は様々な場で他大学図書館の同学・同好の士と共に語り、学び、呑み、食い、時には遊ぶことで様々な栄養を吸収してきた。こうした人々は私にとって、かけがえのない友人たちとなり今でも私を支えてくれている。

世紀の変わり目の頃よりこうした自由な研鑽と刺激の場が縮小されるに連れ、自館に閉じこもりがちになるのは多少やむを得ないとしても、職業人としても人としても自己成長を遂げ、幅を拡げようという志向が全般的に後退気味のように思えるのである(これは、一概に若い皆さんの責に帰すことはできないのだが)。

他の部署で働く職員と異なり、図書館で働く者は、勤務時間以外で過ごす時間—それはプラクティカルな意味での「時間外研修」という狭い意味ばかりではなく、趣味も、遊びも、散歩も、ブラブラ歩きもすべて“学び”のうちであり、無限にある余暇の過ごし方の内にも図書館職員として不可欠な財産を形づくることにつながる何かが必ずあると、私自身が確信しているからに他ならない。

「(図書館というところは) 見えないところで蓄積した養分によって、利用者との出会いを得て花が咲く場」(竹内紀吉『浦安の図書館と共に』1989 未来社)

この言葉をもう一度かみしめたいと思う。

新収資料紹介

①教職員著作目録 2013.6 - 2013.10 配架図書一覧 () は所属学部等

著者名	書 名	出版社	配架場所	請求記号
石井 正敏 (文), 荒野 泰典, 村井 章介 編	地球的世界の成立 (日本の対外関係 5)	吉川弘文館	中央書庫 / 開架	210.18/N77
石川 鉄郎 (商)	財務会計論 3訂版	税務経理協会	中央書庫 / 開架	336.9/I76
榎本 泰子 (文)	宮崎滔天: 万国共和の極楽をこの世に (ミネルヴァ日本評伝選)	ミネルヴァ書房	中央書庫 / 中国言語	289/M188/E63
大淵 博義 (商)	国税の常識 第15版	税務経理協会	中央書庫 / 開架	345/O19
小塩 節 (名)	育てつつ育てられる幼児教育	青娥書房	中央書庫	376.1/O77
金光 仁三郎 (名), 渡邊 浩司 (経) 福井 千香 (経), 山辺 雅彦 訳	フランス民話集 2 (中央大学人文科学研究所翻訳叢書 7)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	388.35/C66
工藤 達明 (法務)	よくわかる憲法 第2版 (やわらかアカデミズム・「わかる」シリーズ)	ミネルヴァ書房	中央書庫 / 開架	323.14/Ku17
小菅 奎申 (法), 松村 賢一 (名) 三好 みゆき (法)	ケルティック・テクストを巡る (中央大学人文科学研究所翻訳叢書 8)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	993.1/C66
小林 謙一 (文), 黒尾 和久 セツルメント研究会 編	縄文集落調査の現在・過去・未来 (考古学リーダー 21・縄文研究の新地平 続々)	六一書房	中央書庫 / 開架	210.02/J69
今 まど子 (名), 高山 正也 編著	現代日本の図書館構想: 戦後改革とその展開	勉誠出版	中央書庫 / 開架	010.21/Ko71
佐々木 信夫 (経)	大都市行政とガバナンス (中央大学学術図書 82)	中央大学出版部	中央 / 経済学部図書室	318.1/Sa75
佐々木 信夫 (経)	新たな「日本のかたち」: 脱中央依存と道州制 (角川SSC新書 175)	角川マガジンス 角川グループ パブリッシング (発売)	中央書庫 / 開架	318/Sa75
サミュエル・ポウルズ 塩沢 由典 (商) ほか	制度と進化のミクロ経済学	NTT 出版	中央書庫 / 開架	331/B68
島田 修一 (名)	社会教育の再定位をめざして	国土社	開架 / 教育学	379/Sh36
白羽 祐三 (名), 山田 創一	債権総論講義 第5版	駿河台出版社	中央書庫 / 開架	324.4/Sh81
杉崎 泰一郎 (文)	サンティアゴ・デ・コンボステラと巡礼の道 (『知の再発見』双書 159)	創元社	中央書庫 / 開架	196.8/B24
エルンスト・カッシーラー 須田 朗 (文), 宮武 昭 (文), 村岡 晋一 (理)	認識問題: 近代の哲学と科学における 3	みすず書房	中央書庫 / 開架	134.834/C25
高橋 徹 (法), 小松 丈晃 ほか	渗透するルーマン理論: 機能分化論からの展望	文眞堂	中央書庫 / 開架	361.234/Ta33
新堂 浩司 高橋 宏志 (法務), 加藤 新太郎	民事訴訟の審理・裁判 (実務民事訴訟講座 第3巻)	日本評論社	中央書庫 / 市ヶ谷法務	327.2/J55
高橋 由明 (名)	企業経済学の基礎: 企業目的、歴史と理論、方法 (中央大学学術図書 83)	中央大学出版部	中央書庫 / 戦略経営	335.1/Ta33
只木 誠 (法) 奥村 文二 (法務), 高橋 直哉 (法務) 安廣 文夫 (法務) ほか	刑法演習ノート: 刑法を楽しむ21問	弘文堂	中央書庫 / 開架	326/Ta16
建部 正義 (商)	21世紀型 世界経済危機と金融政策	新日本出版	中央書庫 / 開架	333.6/Ta94
中央大学人文科学研究所	第二次世界大戦後のイギリス小説: ベケットからウィンターソンまで (研究叢書 56)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	930.2/C66
中央大学人文科学研究所	夏の技法: クリア・リーディングとは何か (研究叢書 57)	中央大学出版部	中央書庫 / 開架	902.9/C66
津野 義彦 (法)	法知の科学 XIII	津野文庫 中央大学生協書籍部 (販売)	中央書庫 / 開架	322/Ts81
鶴田 満彦 (名)	全球化資本主義日本経済 (世界社会主义研究丛书: 参考系列 58)	社会科学文献出版社	中央書庫	333.6/Ts87
富岡 幸雄 (名)	税務会計学講義 新版第3版	中央経済社	中央書庫 / 開架	336.98/To56
新田 秀樹 (法), 本沢 巳代子 編	トピック社会保障法 第7版	不磨書房 信山社 (販売)	中央書庫 / 開架	364/Mo93
畑尻 剛 (法), 古野 豊秋 編	新・スタンダード憲法 第4版	尚学社	中央書庫 / 開架	323.14/F93
原 正人 (法)	近代中国の知識人とメディア、権力: 研究系の思想と行動、1912 ~ 1929	研文出版	中央書庫 / 中国言語	316.33/H31
兵藤 宗吉 (文), 野内 類 編著	認知心理学の冒険: 認知心理学の視点から日常生活を捉える	ナカニシヤ出版	中央書庫 / 開架	141.5/H99
深町 英夫 (経)	身体を繋げる政治: 中国国民党の新生活運動	岩波書店	中央書庫 / 開架	222.074/F72
升田 純 (法務)	インターネット・クレーマー対策の法理と実務: 判例分析を踏まえて	民事法研究会	中央書庫 / 開架	336/Ma66
松野 良一 (総) ほか	映像制作で人間力を育てる: メディアリテラシーをこえて	田研出版	中央書庫 / 開架	377.15/Ma84
宮本 太郎 (法)	社会的包摂の政治学: 自立と承認をめぐる政治対抗	ミネルヴァ書房	中央書庫 / 開架	364/Mi77
村上 研一 (商)	現代日本再生産構造分析	日本経済評論社	中央書庫 / 開架	332.106/Mu43
矢島 正見 (文)	戦後日本青少年問題考 改訂版	青少年問題研究会 学文社 (発売)	中央書庫 / 開架	371.47/Y16
矢内 一好 (商), 高山 政信	海外移住・ロングステイのための税務基礎知識 第2版	財経詳報社	開架	345.1/Ta56
矢内 一好 (商)	改正租税条約のすべて	財経詳報社	中央書庫 / 開架	345.1/Y54
山城 雅江 (総)	Popの交錯する地勢: アメリカ / ウォーホルと沖縄のポップ文化誌 (学術叢書)	学術出版会 日本図書センター (発売)	中央書庫 / 開架	361.6/Y44
今田 高俊 山田 昌弘 (文) ほか	責任編集 社会生活からみたリスク 新装増補 (リスク学入門 4)	岩波書店	中央書庫 / 市ヶ谷法務	301/R47
水野 和夫, 古川 元久 山田 昌弘 (文) ほか	編執筆 新・資本主義宣言: 7つの未来設計図	毎日新聞社	開架	332.06/Mi96
山田 昌弘 (文), 白河 桃子	著 「婚活」症候群 (ディスカヴァー・携書 107)	ディスカヴァー・ トゥエンティワン	開架	367.4/Y19
李 廷江 (法), 大里 浩秋 編	辛亥革命とアジア: 神奈川大学での辛亥100年シンポジウム報告集	御茶の水書房	中央書庫	222.071/O74
渡部 裕巨 (名), 北村 敬子 (商) 石川 鉄郎 (商) 間島 進吾 (商), 浅倉 和俊 (商) 梅原 秀継 (商), 中村 英敏 (商) ほか	編著 テキスト初級簿記 第2版	中央経済社	中央書庫 / 開架	336.91/W45
渡部 裕巨 (名), 北村 敬子 (商) 石川 鉄郎 (商) 間島 進吾 (商), 浅倉 和俊 (商) 梅原 秀継 (商), 中村 英敏 (商) ほか	編著 テキスト上級簿記 第4版	中央経済社	中央書庫 / 開架	336.91/W45

* (法): 法学部、(経): 経済学部、(商): 商学部、(文): 文学部、(総): 総合政策学部、(理): 理工学部、(法務): 法務研究科、(会計): 国際会計研究科、(戦略): 戦略経営研究科、(研): 研究開発機構教授、(名): 名誉教授

* 配架場所は2ヶ所までとした

My Cul

(マイ・クル)
中央大学図書館広報誌 No.23
(2014年4月発行)

編集発行 中央大学図書館
〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1
TEL.042-674-2546

URL: <http://www.chuo-u.ac.jp/library/>